

## わが国におけるリカードウ研究\*

中 村 廣 治

### はじめに

デイヴィッド・リカードウ (David Ricardo, 1772-1823) への言及は 1880 年代に遡るが、彼の地代論または自由貿易論を時論的に利用したものだ<sup>1)</sup>。その本格的な紹介は、河上肇の『近世経済思想史論』(1920 年) および『資本主義経済学 of 史的発展』(1823 年) を俟たなければならなかった<sup>2)</sup>。しかし、「研究」というにたる業績は、ともに川上の薫陶を受けた森 耕二郎『リカアド価値論の研究』(1928 年) と堀 経夫『リカアド価値論と其の批判史』(1929 年)、ならびに小泉信三『リカアド研究』(1929 年) にはじまる。

### 1 戦前・戦中の諸研究

#### 森『リカアド価値論の研究』

本書は「緒論」, 「本論」(三編), 「結論」から成る。「緒論」ではリカードウの「費消労働価値説」が「彼の全経済理論の基本原則」であることが強調される。「本論」・「第一編」においては、彼の「価値論」がスミスの「支配労働価値説」を斥けた「費消労働価値説」であって、価値の実体と(内在的)尺度とは二にして一であり、「労働は価値の形成実体であるがゆえに、その分量は価値の尺度である」。しかし、これと「外在的尺度」としての貨幣との関連が明らかにされなかったために、「外在的尺度」としての「不変の価値尺度」が追究された、と説かれる。第二編は「価値論の修正」を対象とし、第三編は「価値論」に基づいて「分配論」(地代, 賃金・利潤)が論じられる。「結論」はリカアド価値論は「本体」として根底に労働価値論が残るが、「労働価値と生産価格」との矛盾を労働価値論に基づいて説明することができず、「修正」としてこれを処理した、という。基本はマルクス (Karl Marx, 1818-83) の『剰余価値学説史』(*Theorien ueber den Mehrwert*, 1905-10) に準拠していることは明らかであるが、『原理』初・二版と第三版との異同は勿論、当時利用可能な限りのマルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834), トラウア (Hutches Trower, 1777-1833), マカーロク (John Ramsey McCulloch, 1789-1864) 宛リカードウ書簡も利用されている。

#### 堀『リカアド価値論とその批判史』

本書は二編からなり、第一編は「価値論及び価格論」(4章)であり、第二編は「労賃論」(2章)である。それぞれ、リカードウの価値論と賃金論がまず考察され、ついでその「批判史」が追跡される。第一編では「価値論」の基礎原理としての位置が示され、ついで『原理』初・二版から第三版への変化が説かれる。次に彼の「価値論の要点」として、価値の原因と尺度、および「修正」が論じられるが、彼の「価格論」も「修正」の一環として論じられるところに、その特徴がある。最後の「批判史」は、追隨者(「通俗化」)としてJ.ミル (James Mill, 1773-1836)、マカロク、ダ・キンシイ (Thomas de Quincey, 1785-1859)、その「変形」者としてトランズ (Robert Torrens, 1780-1864) とラムゼイ (George Ramsey, 1800-71)、「否定」者としてマルサスとベイリイ (Samuel Bailey, 1791-1870) の所論が紹介・論評される。第二編もほぼ同様の手法をとる。

### 小泉『リカアド研究』

上記の森と堀の研究がリカードウの労働価値論を重視するのと対照的に、小泉はマーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) らを踏襲しつつ、「修正」を踏まえて、彼の価値論の本体は生産費説にある、と説く。また、通貨論や機械論にも考察は及び、包括的な研究である。

以上の三部がわが国リカードウ研究の嚆矢をなし、また二つの異なる研究の潮流の淵源をなし、以降の研究に強い影響を及ぼす。これらとはほぼ同時期に波多野 鼎『価値学説史』第1巻 (1928年) も公刊され、スミス (Adam Smith, 1723-90)、マルサスらに並ぶ古典派の一環として、リカードウ価値論も考察されている。

これらに徴して、リカードウ研究は大正末期に本格化したことが分かる。

この時期の屈指の研究は、内外の諸研究を踏まえた舞出長五郎『経済学史概要』上巻 (1937年) 所載の「リカードウ」の章であろう。

### 個別的諸研究

これらのほかに、リカードウの賃金論、地代論、貿易論、恐慌論の研究ないしそれへの論評を含む優れた研究があげられる。森『労賃学説の史的展開』(1928年)、堀『地代論史——特に差益地代説を中心に』(1939年)、谷口吉彦『恐慌理論の研究——古典派恐慌理論を中心に』(1940年)、松井 清『国際貿易思想史』(1941年)、北野大吉『英国自由貿易運動史——反穀物法運動を中心に』(1943年) がそれを代表する。

## 2 戦後の諸研究・第1期

戦後の経済学および経済学史研究の中心は、マルクス、ついでスミスであった。前者は資本主義体制変革の旗手として、後者は旧日本帝国のアンシャン・レジームを超克して市民社会を実現する思想の導き手として。リカードウ研究もこの両者または一方との関連から関心をもたれたが、それほど活発ではなかった。資本主義体制の矛盾、その表れとしての恐慌、失業、その根底をなす資本蓄積論が論題の集中するところであったからである。

戦後の飢餓と失業を乗り越え、経済復興の終了も展望される 1950年代に入って、以降の研究

をリードする論稿が現れる。吉澤芳樹「古典経済学の完成——ダヴィッド・リカード」(出口勇蔵編『経済学史』1953年、所収)が、それである。それによると、リカードウは三重の問題に直面している。最基底に「産業革命」という世界初の大問題が横たわり、中層にこれと深く関わる「過渡的恐慌」の頻発(1793, 97, 1814-5年)があり、最上層に断続しながら四半世紀間も続くナポレオン(大陸)戦争がある。これらは相互に加重しあって、現実の問題を深刻・複雑化する(穀物価格、貧困問題等)。

リカードウの『原理』は、労働価値論に基づく分配論と、利潤が保障される限り進展する資本蓄積(経済成長)により、当面する不況(農業不況を含む)を乗り切り、労働者階級には自然賃金を上回る市場賃金の獲得を可能にし、穀物貿易を含む自由貿易のもとに国際的な繁栄(共存共栄)がもたらされる。そのもとにおいては、国内的には政治的抑圧は不要となり、国際的にも平和が約束される。これが吉澤論稿の描くリカードウ『原理』の展望である。

しかし、ラダイト運動(1811-12, 16, 26年)に現れているように、産業革命の進展は、機械の導入と失業という問題も、リカードウに突きつけていた。これを考慮に入れるとき、この薔薇色の展望は、はたして保持されるだろうか。

真実一男『機械と失業』(1959年)は、まさにこの課題に取り組んだ先駆的労作である。この問題は、これ以前に、戦後の失業問題を背景に、マルクスの「産業予備軍」の理論に関連して、すでに論じられていが、リカードウに即したモノグラフとしては戦後最初のものである。本書はリカードウの『利潤論』において示唆されただけの旧見解(補償説)から『原理』第三版における新見解への変化を解明し、さらにバートン(John Barton, 1789-1852)の『社会の労働者階級の状態』(1817年)の所論も吟味する。バートン宛リカードウ書簡(1817年5月20日付、返書)に徴すると、リカードウへのバートンの影響は即時的ではなかった。それは、リカードウが新投資における固定資本比率の高度化だけを考慮し、既存流動資本の固定資本による代置を考慮しなかったからである。新見解への変化は、まさにこの転化に正面から取り組んだ。こうしてそれは、マルクスの産業予備軍の想源のひとつとなったと考えられる、というのである。

ほぼ同時期に豊倉三子雄『古典派恐慌論』(1959年)が出版される。本書は副題の「マルサスとリカードの論争史」から明らかなように、まず両者の往復書簡を中心に両者の恐慌論の形成を解明し、次いでリカードウの「部分的恐慌論」、マルサスの「恐慌論」をそれぞれの『原理』を中心に論じ、最後にリカードウの機械論を『原理』第三版を中心に究明する。そうしてこの新見解は旧見解の「発展的拡充」と捉えられ、耐久的機械により「一般的供給過剰論」への「基礎」が与えられる、と説く。主としてブニアチアン(M. Bouniatian, *Geschichte der Handelskrisen in England 1640-1840*, 1908)に依拠する「附章 イギリスにおける過渡的恐慌史」も有益である。

なお、50年代までの特記すべき論稿としては、井出文雄「リカードの減債基金論」(同著『古典学派の財政論』1948年、所収)、生沢健三「リカードウ『原理』第七章「外国貿易論」の分析」(関西学院大学『経済学論究』第4巻第4号、1951年。森田桐郎編『国際貿易の古典理論——リカードウ経済

学・貿易理論入門』1988年、所収)、ならびに末永茂喜「リカードウの貨幣論」(同著『古典派経済学』1953年、所収)があげられる。

富塚良三「リカードウにおける蓄積論の構造」(同著『蓄積論研究』1965年、所収)と羽鳥卓也「機械と失業」(同著『古典派資本蓄積論の研究』1965年、所収)は、リカードウの機械に関する新見解について異なる理解を提示する。前者は労働雇用が流動資本量に、後者は「総生産物」に依存する、という。したがって、前者においては、流動資本の固定資本への転形が進む限り、失業の発生は必然的であるが、後者では必ずしもそうではない。それゆえ、一方は新見解をマルクスの産業予備軍の想源の一つと説き、他方はこの関連を否定して、リカードウが古典学派の枠内にある、と主張する。

60年代の注目すべき研究は、溝川喜一『古典派経済学と販路説』(1966年)と小林時三郎『古典学派の考察』(1966年)である。前者の優れた成果は、販路説に二つのタイプ——バーター型と蓄積(I・S恒等)型——があることを明示した点にある。J. B. セー(Jean-Baptiste Say, 1767-1632)の「販路説」は前者に傾斜し、J. ミル(James Mill, 1773-1836)の初期リカードウのいう「ミル氏の法則」とリカードウのそれは、後者に傾く。小林の寄与は、「地金論争」におけるリカードウの一論点(為替相場をめぐるマルサスとの論争)が彼の初期利潤論(私のいうマルサスとの「貿易・利潤率論争」と関連すると説くところにあるが、タッカー(G. S. L. Tucker)の示唆(The Origin of Ricardo's Theory of Profits, *Economica*, N. S., Vol., XXI, pp. 320-1)の一部を踏襲したものであって、彼以上の論拠を含んでいない。

大西信隆『リカード新研究』(1969年)は包括的な研究であるが、必ずしも新しくなく、以降の研究にほとんど見るべき影響を与えていないので、挙示するにとどめる。

中野 正「1819年の恐慌とリカードウ」(『古典恐慌論』1969年、所収)は、「部分的過剰」論者としてリカードウとセーを同等視するマルクスを批判し、議会演説を典拠に、リカードウは当時の一般的不況を認めており、その原因が人口に比しての資本の「不足」(inadequacy不適當)にあることを示している、と論じる。

### 3 戦後の諸研究・第2期

吉澤「発展的社会把握におけるリカードウとマルクス」(内田義彦編『経済学史』1970年、別冊)は、以降の研究を先導する。当時の日本経済の高度成長を背景に。

70年代には、それぞれ注目すべき四著作が現れる。羽鳥『古典派経済学の基本問題』(1972年)、真実一男『リカード経済学入門』(1975年)、中村廣治『リカードウ体系』(1975年)および菱山 泉『リカード』(1979年)である。

羽鳥『基本問題』中の一章「リカードウにおける価値と分配の理論」は、『利潤論』を吟味して、スラッフアの「穀物比率論」に異を唱える。というのは、農業に投下される資本は、貨幣額で表示されている。というのは、そのうちの固定資本部分は、ほとんどが製造業品であって、流

動資本部分と異なり、直接に穀物量で表示することはできず、穀物を価値の尺度（ないしヌメール）として相応の穀物量に換算されている。その意味からして、ここにおける穀物モデルの内実は、実物モデルの姿をとった価値モデルにほかならない（この点は、後のマルサスとの「農業剰余論争」において明確となる）。さらに羽鳥は、「生産の難易」による交換価値規定論が後来の労働価値論の萌芽をなすことを示唆した後、その系として示される賃金・利潤相反論が、農業を含む全産業部門についてではなく、製造業部門についてのみ妥当する部分的な利潤規定論であることを明らかにする。続章の「リカードウ蓄積論の基本構成」において注目すべきは、第1に「絶対価値」が『原理』初版から存在するという主張であり、第2に『原理』「地代」章の「価値」章に直続する特有の位置に関する説明である。それによると、地代は確かに耕境地（または所要最終投下資本）で生産される穀物を除く他のすべての穀物価値の一部をなすが、既存利潤の一般的利潤を超える部分の「移転」にすぎず、したがって、なんら「富」の追加部分ではなく、蓄積の真の元本にはなりえない。それゆえ地代は、真の富の分配考察する前に排除されなければならない。勿論、資本蓄積元本を確定する基礎を掃き清めるためである。こうして、穀物法批判の理論的基準が確立される。

真実『入門』は二つの部分からなり、一方はリカードウの生涯を簡潔に語り、他方は彼の経済学の全容を平明に紹介する。本書は、現在もなお、リカードウに関する優れた手引きである。

中村『体系』は、「地金論争」から『原理』初版にいたるリカードウの軌跡を、その途上の書簡ならびに主要著作（『地金高価論』、『利潤論』および『経済的・安定通貨案』等）を通じて考察する。

中心的論点の一つは、彼の価値論の生成を追究することにあるが、必ずしも成功していない。その間の特徴の一つは、『地金高価論』第四版「付録」を全面的に吟味した点にある。その一成果は、彼の「一般的過剰」否定（リカードウにおける「セー法則」）が人の無限の蓄積欲に基づく貯蓄即投資にあることを明らかにしたことである。もう一つは、タッカーがリカードウ利潤論の「起源」としたマルサスとの「貿易・利潤率論争」の分析を試みた点にある。これと「地金論争」との関連は不確定であるが、『利潤論』との結びつきは明白であって、真の経済学者としての起点はここにある。しかし、この論争と後続の「穀物法論争」とは区別されるべきである。というのは、この論争の背景は、「繁栄の実質的（material）増大」にあるから。続いて「穀物法論争」が同様の手法で論じられるが、その解明に成功しているとはいえない。

『原理』にいたる前にリカードウは、「価値」の問題を解決しなければならず、それに達するや否や、価値「修正」の問題に苦悶せざるをえなかった。「富」と「価値」とが峻別され、投下労働量による価値の量的規定が達成される（これは「生産の難易」の量的表現には違いないが、安易に両者を結びつけることはできない。後述、参照）。直ちに厄介な「修正」の問題が彼を待ち伏せていた。彼はこの困難を証券仲買人としておなじみの「年金法」によって回避するが、理論的な解決とはいえない。

『体系』になんらかの貢献があるとすれば、「価値」章から「外国貿易」章にいたる『原理』冒

頭七章の構成の解明にあろう。それによると、リカードウの理論的課題は、『国富論』の相応する諸章の「再鑄」(シュンペーター)にある。「価値」と「富」とは範疇を異にし、「効用」は価値規定から排除される。「支配労働」ではなくて「投下労働」が「価値の尺度」であり、価値論の系として「賃金・利潤相反」関係が導出される。価値の「修正」にもかかわらず、投下労働価値論が以降の分配の基礎に据えられる(「価値尺度」としての金=貨幣価値不変を仮定して)。「地代」章は自然の制約により原生産物に課された特殊な(限界的)価値規定を提示するという意味で、「広義の」価値論をなす。それが価値の第一分配分としての「地代」をも説明する。この最初の二章の順序は、「資本の蓄積と土地所有」が存在する社会段階にも投下労働価値論が妥当することを主張する(スミスを批判する)ものであり、ここにリカードウにおけるスミスの批判的継承が如実に明かである。こうして「価格」章へと自然に接続する。現実の「市場価格」が「価値」の貨幣表現としての「自然価格」に一致することは偶然であるが、より高い利潤率を目指す資本の部門間自由移動が両価格の一致の傾向を必然のものにする。したがって、以降の分配の分析は、金価値不変、(賃金財の)両価格一致を前提に進められる。その意味において本章は、先行「価値」諸章の外延・具体化をなすとともに、以降の分配諸分析的方法的根拠を与える結節の章にほかならない。

さらに『体系』は、『原理』の究極目的が蓄積動機・元本としての利潤とその趨勢を確定することにあり、その意味において分配を通じての再生産の分析として、彼の「体系」は把握されるべきである、と説く。「外国貿易」章は、それが賃金による利潤規定といかに関わるか、という問題を第1の主題する限りでは、『原理』の理論構成上は、「利潤」章の「付録」にほかならず、原初の「外国貿易・利潤率論争」の決着を示すものである。勿論、本章の内容・意義はこれにとどまらない。自由貿易論を理論として基礎づけたからであり、ここに『原理』段階のリカードウの進展をみることができる。しかしながら『体系』においては、「価格」章が「賃金」章から分離・独立されるべき理由を、まだ明らかにしえていない。また中村は、「古典派の理論的展開——マルサスとリカードウ」(杉原編『講座 経済学史』Ⅱ, 1976年)においてリカードウの理論像の全容提示を試みた。

菱山はケンブリッジ学派とケネー(Francois Quesnay, 1694-1774)の研究者であったが、スラッファ(Piero Sraffa, 1898-1983)の研究に専心し、その関連からリカードウ、とくに彼の「不変の価値尺度」に関心をもち、リカードウの新古典派的(ロビンソン [Joan Violet Robinson, 1903-83]のいわゆる新・新古典派的)把握はもちろん、マーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)流のそれも否定する。

80年代には、羽鳥『リカードウ研究』(1982年)、松浦秀嗣『リカード経済学』(1982年)、M. Morishima(森嶋道夫)、*Ricardo's Economics A general theory of distribution and growth* (1989)、および千賀重義『リカードウ政治経済学研究』(1989年)と四冊ものモノグラフが現れる。

第一の羽鳥『研究』は、三部からなる。第一部は初期リカードウの価値と分配を考察し、第二

部は『原理』初版から第三版までの価値と分配の理論を研究し、第三部は晩年の「絶対価値」の探求を究明する。各部において貴重な解明と示唆が見出される。第一部において示唆的なのは、『利潤論』の穀物モデルをめぐるリカードウ対マルサスの論争（これを羽鳥は「穀物剰余論争」と呼ぶ）の詳細な吟味である。というのは、リカードウがまだ生産費用に穀物価格を依存させていることが明らかだからである。第二部で印象的なのは、第三版「価値」章・第一節における僅か一語（‘almost’）の挿入が「社会の初期段階」想定が変化していることを看破した炯眼にある。第三部は晩年の未完の遺稿「絶対価値と相対価値」を考究し、「不変の価値尺度」の不在を明確にしている。

松浦の研究は『原理』冒頭六章と機械論の簡潔な解説である。

森嶋の特徴は、本書の副題に示されている。注目すべきは、地代の究明で各等級の耕作面積を導入して地代量を明らかにしている点、および新機械論がセー法則と矛盾し、リカードウの論理的錯誤と断じているところにある。

千賀の見解の特徴は、リカードウの「価値」をすぐれて「相対価地」と掴む点にある。確かにそれは彼の価値論の重要な一側面をなす。しかし、第三版に示される「絶対価値」への関心は、マルサスの『原理』(*Principles of Political Economy considered with a View to their Practical Application*, 1820)における「修正」批判に対抗する意図に関わっているし、相対価値の変化を絶対価値のそれと結びつける媒体として「不変の価値尺度」に執着し続ける所以が必ずしも明確にされていないように思われる。

続く90年代には、森 茂也「デイヴィッド・リカードウ」(同著『古典派経済成長論の基本構造』1992年、所収)、羽鳥『リカードウの理論圏』(1995年)および中村『リカードウ経済学研究』(1996年)が公刊される。

森はリカードウの成長論を古典派成長諸理論の一つとし、『原理』の価値と分配を吟味して、資本蓄積の進展につれて一般的利潤率の趨勢的低下と「静止状態」への到達を平明に示している。

羽鳥の著作は三群からなり、第一は『原理』における価値と分配との結びつきを論じ、第二は分配を取り扱い、第三群は、(1)旧機械論から新機械論への変化の時期の確定を試み、(2)とくに『農業保護論』(*Protection to Agriculture*, 1822)を中心に彼の相殺関税と輸出奨励金を吟味する。これについてはかつて詳細に論評したことがあるので(熊本学園大学『経済論集』第2巻第3・4合併号、第3巻第3・4合併号、1996/97年)、ここでは『原理』における「三階級間の分配率は価値論といかに関わるか」、という問題の解明がきわめて興味深いことを指摘するにとどめたい。

最後の中村の『研究』は、二部からなり、第一は価値論の形成と展開、第二はリカードウ経済学の諸問題を究明する。前者の要点は、投下労働価値論の生成を論理的・実証的に追跡したところにある。「地金論争」においてリカードウは、金をたんなる一商品、金=貨幣を「価値の尺度」として掴む。そうしてこの把握が、スミスの生産費説を止揚して、彼を労働価値論へ到達さ

せる梃子として作用する。スミスによれば、賃金が増えれば、全商品価格は騰貴する。しかし金も一商品であってしかも他のすべての商品の価値尺度であるから、すべての価格が増えるとは限らない。その限りにおいて、スミス理論に一般的妥当性がない。固定・流動資本の組み合わせやその他の条件が生産部門間で異なるため、諸商品の価格は、単調ではなく、さまざまに変化する。生産諸条件が全部で金生産部門と同じだと仮定すると、賃金騰落の前後ですべての価格は不変にとどまる。この強い、むしろ極端なケースに限って、投下労働価値論は正確に妥当する。「修正」が必然となるのは当然である。さらに注目すべきは、「価格」章が「賃金」章から分離されるべき理由が明らかとなろう。その主張によれば、分離の理由は、諸商品価格と労働商品の価格＝賃金との調整機構が異なることにある。すなわち、商品一般の価格調整は生産諸部門間の資本の移動を必要・十分条件とするが、それと対照的に、賃金の市場率（労働の市場価格）がその自然率（労働の自然価格）に引き寄せられるのは、人口の漸次的な増減を伴う資本総量の増減による。また本書中の「初期リカードの租税論」や別稿・「リカード『地金案』考」（熊本学園大学『経済論集』第5巻第3・4合併号，1999年）も参考になるかもしれない。

20世紀の終りに竹永 進『リカード経済学研究——価値と貨幣の理論』（2000年）が出版される。本書は二部からなり、一方は『原理』の価値論と遺稿「絶対価値と相対価値」を考察し、リカード、トレンズおよびマカーロック間の「修正」をめぐる議論を検討する。他方はリカードの通貨論を論じる。おのおのにユニークな見解が見出される。第一にリカードの価値論の核は投下労働価値論ではなく、むしろ生産費説にある。第二に、リカードは非中立的な貨幣を認識している、と主張する。二つの点とも、やや誇張されているように感じられる。というのは、労働価値論とそれに基づく賃金・利潤相反論は、彼の分配と成長把握の理論的な基礎をなしているし、「強制貯蓄」に対するリカードのマルサスへの譲歩は、リカードにとっては二次的な意味しかない。不換通貨の過剰発行による「減価」を正義に反する、と弾劾することに主な目的があったからである。

#### 4 現在の諸研究

今世紀に入ると、リカードに関するモノグラフは僅かだが、優れた論稿が少なくない。その二、三を代表的に挙示すると、佐藤有史「現金支払の政治学——リカードの地金支払案および国立銀行設立案再考」（一橋大学古典資料センター“Study Series” No. 41, 1999年）、渡会勝義「デイヴィッド・リカードの救貧論と貯蓄銀行」（同上, No. 45, 2000年）および千賀「デイヴィッド・リカード——普遍的富裕の選択」（鈴木信雄編『経済学の古典的世界 1』2005年，所収）である。

佐藤はリカードが貨幣数量説と無関係であって、ここでも彼の価値論が妥当することを強調する。彼の「地金案」は、(1) 国内通貨が紙券からだけなり、金は可能な限り国際貨幣の準備としてのみ機能すべきであり、(2) 金地金の市場価格を目安とする紙券発行の適切な裁量により、その過剰発行は有効に抑制されて、紙券の金兌換も阻止されるような制度を意図したものであ



る。要するにリカードウは、デッド・ストックとしての金を及ぶ限り節約する「経済的」で通貨「価値」の安定した通貨制度の確立をもくろんだのである。

渡会はリカードウの貯蓄銀行の設立と運営を援助する活動に注目する。リカードウの意図は、彼の救貧法の漸次的な撤廃の唱道に応じて労働者間に自助・独立の精神を養成することであった、と指摘される。

千賀はリカードウの生涯と活動を簡潔にたどり、彼の価値と分配の理論に基づく社会の展望を示す。それによると、リカードウは「賃金」章における継続的な投資のもとにおける労働者の境遇改善の様を描き、穀物法、救貧法等のさまざまな障害漸次的な撤廃を求めた。それらを実現する重要な一環として、無記名投票による選挙法改正・議会改革案さえ意図している。

リカードウに関するモノグラフ、ないしそれに準ずる著書は、三冊出版されている（2007年3月、現在）。海老原良一『資本蓄積と失業・恐慌——リカードウ、マルクス、マルサス研究』（2004年）、佐藤滋正『リカードウ価格論の研究』（2006年）および福田進治『リカードの経済理論——価値・分配・成長の比較静学分析／動学分析』（2006年）がそれである。

海老原の著書は4篇からなるが、そのうちの2篇はリカードウ（後の2編はマルサス）に関わり、マルクスとの関連が焦点をなしている。第1篇・4章はリカードウ機械論研究であり、第1章が中核をなす。新機械論は、労働（不生産的労働を含む）の雇用が「総所得」に依存すると説きながら、これを物的「総生産物」と混同し、この「減少」を失業発生論の論拠とするが、この「減少」は、機械採用により一般的に増大する生産量が需要不足により「一般的過剰」に陥る、というマルサスの見解を斥けようとするもの、と捉えられる。

第2編は、「資本の絶対的過剰生産」のマルクスとリカードウとの比較分析である。後者の継続的で急速な資本蓄積のもとでは、市場賃金の上昇による（市場）利潤率の低下が利潤量まで減少させて「資本の絶対的過剰」をもたらす「理論的」可能性を認めているものの、「富源の終焉」にいたるまでは、このような事態は生じない、というリカードウの所論は、マルクスの好況期（「高圧のもとでの生産期」）が資本の絶対的過剰生産を準備する一因とされることからして、リカードウの一時的（市場）利潤率低下の把握がマルクスの「先駆」と位置づけられている。

佐藤『研究』は、書名よりも副題の“A Study of Ricardo’s “On the Principles of Political Economy, and Taxation””のほうが本書の内容を伝えている。というのは、それは三篇からなり、第1篇は（スミスの租税論を含むが）リカードウの課税編を対象とし、第2編・「資本蓄積の理論」は、いわゆる「論争的諸章」中の第19章（「貿易経路上の突然の変化」）、第20章（「価値と富」）、第21章（蓄積の利潤と利子に及ぼす影響）とセーのリカードウへの影響を検討した諸章からなり、最終編・「外国貿易の理論」は、第22章（「輸出奨励金」）、第23章（「生産奨励金」）および第25章（「植民地貿易」）を組上にのぼせているからである。あえて『価格論の研究』と題されたのは、これまでほとんど同一視されがちだったスミスとリカードウの「自然価格」把握の相違を、租税論等を素材に具体的に解明するという視角から、と察せられる（「序言」、参照）。ここに「論争的諸

章」の本格的な研究の先鞭がつけられたといえよう。

最後の福田の研究は、序章、本論・6章および終章からなる。まず初期リカードウの「利潤論」の形成と展開が解明され(第1章)、ついで『原理』労働価値論の展開が初版から第三版にわたって研究される。勿論、「修正」が分析の核をなす(第2章)。さらにその論理構造が明らかにされるが、福田は、その前提条件として、(1)所与の生産諸条件、(2)均等利潤率の形成、(3)金生産部門における労働生産性不変、(4)垂直型生産過程のもとでの部門間の等しい資本組成がある、という。(4)が放棄されれば、当然、「修正」が生じる。この場合、商品の「自然価格」は、賃金コストと均等利潤の合計(=生産費)として規定される。とすれば、リカードウの労働価値論は、生産費説を基礎に形成されている、といってよい。このような労働価値論がその系として「剰余の原理」を導く(第3章)。彼によれば、「賃金」章は三層からなる。その基層は、実質賃金(賃金バスケット)が変わらないと仮定すれば、貨幣賃金が賃金財価格の騰落につれて騰落することを示す。これが一般的利潤率の傾向的低下の基盤をなす。第2層においてリカードウは、資本蓄積の事情のもとでの実質賃金の変化を導入する。資本蓄積の進展は、早晩、人口の増加をもたらすから、劣等地耕作の進展を伴う。最後の最上層は、資本と人口のさまざまな増加のもとにおける賃金の動向を吟味する。資本と人口がさまざまに増減する結果、労働の超過需要(正または負の)が生じる。ここにリカードウの動学分析がある。それゆえ彼の経済学は、「分配と成長の分析」と特徴づけられる(第4章)。先行諸章を総括して、第5章において福田は、『原理』の理論構造を論じる。彼は「価格」章と「賃金」章を重視する。というのは、前者は他の諸章における比較静学の基礎をなすからであり、「価値」章さえ均等利潤率の支配を前提とする以上、「価格」章に基づいているからであり、「賃金」章は動学分析の基礎をつけ加えるからである。こうして「リカードウによる分配と成長の分析」が達成される。「動学分析の原理」は、(1)賃金・雇用の決定原理、(2)「労働需要の原理」および(3)「労働供給の原理」からなる。したがって人口増加は、外生変数ではなくて内生変数であって、リカードウの理論体系はクローズド・システムをなす。

「価格」章が「価値」章の前提をなすことは確かであるが(「外国貿易」において価値論が妥当しないことを想起せよ)、これとそれに基づいて確立された「価値」章が基礎「原理」として『原理』の理論体系が構築させていること(たとえば、成長の基礎としての「剰余の原理」の導出)とは、区別されるべきではないかと思うが、いかがであろうか。

## む す び

リカードウ経済学の経済学史上の地位と名声は、二度に渡り「危機」に直面したが、やがてその地位は回復された。今日においては、成長理論の独創的な先駆者として不動である。彼の通貨理論と経済学との関連のような「未解決の諸問題」が残っている以上、研究はさらに推し進められる必要がある。この二つはダイコトミーとして処理して済ますことができるのか、それとも理

論的になんらかの総合が図られるべきなのか。彼の著作のおよそ半分の量が通貨・金融関係であることを想起すれば、まことにシリアスな問題である。「現在」は優れて「歴史としての現在」である限り、租税を含む政治と経済を現代において考える際、リカードウとの対話は、依然として、われわれに示唆するところ大であろう。

\* 本稿は2007年1月6日、中央大学駿河台記念館において開催の「リカードウ研究会」で公表した際  
の原稿に、多少、手を加えたものである。

注

- 1) 真実一男「明治及び大正前期におけるリカードウ導入史」(大阪市立大学『経済学年報』16集, 1962年), 杉原四郎『西欧経済学と近代日本』(1972年), 80, 107, 131, 172-3, 191-2ページ等, 参照。また, 経済学史学会編『日本の経済学』(1984年), 277ページ, 以下, および同書巻末の「主要文献目録」, 参照。
- 2) 同上, および同上書, 第三部・第三章, 参照。